

リハビリテーションと俳句 綾乃

私は、リハビリテーションの仕事をしています。
リハビリテーションは、怪我や病気からの「回復訓練」とい
うイメージが強いですが、語源的には、「リ」は「再び」、「ハビ
リス」とは「人間にふさわしい、適した」という意味がありま
す。心・体・社会的な弱さや、衰え、悲しみが起きてても、
「人は再び、ふさわしい人になる」ことを患者さんが見せて
くれ、私はそれを日々学んでいます。
俳句は、季節の力や美しさ、普遍性をもって、私に様々
なことを教えてくれます。
リハビリテーションに励む人からの学びと俳句からの学び
は、どこかで繋がっているように思います。

車椅子緑の道に譲り合ふ

酸柔かな持病とともに生くる人

花万朶けふの一步のより遠く

実桜のけふの色はと患者問ふ

薬降る卒寿の人の脈に触れ

リハビリを座して待つ人夏の朝

白南風や病室の窓つと開き

夏菊を臥す人に向け生けにけり

肺の音聴く静けさや日の盛

病葉も風に揺れたる櫂かな

《作品鑑賞》

ちどり

七年前、私の母は脳梗塞になり、手術の後リハビリを受け
た。毎日細やかに、やさしく、そして粘り強くリハビリをし
てもらった。おかげで、九十五歳の母は、みなさんに支えて
もらいながら、今でも自分で田舎で暮らしている。

車椅子緑の道に譲り合ふ

新緑の中、車椅子の人同士が笑顔で道を譲り合っている。と
てもすがすがしい。

白南風や病室の窓つと開き

梅雨が明け、病室の窓をさつと開けると、南風が一気に入っ
て来る。部屋の空気が一変して、元気が出て来る。

病葉も風に揺れたる櫂かな

病葉も共に風に揺れている櫂から、病氣の人もそうでない人
もみんな共に生きていこうと思う。

四国の国道を走る 大畑 恵

夫婦で五年をかけて、車で四国のすべての国道を走りました。高知が私の故郷であり、また、夫が学生時代を過ごした地でもあります。きっかけは、夫がユーチューブで国道四三九号線を走っている人の投稿を見たことでした。最初は、徳島駅前から四万十市までの国道を走りました。対向車が来るとすれ違うのに苦勞するような道で、ガードレールの無いところもあり、怖い思いをしました。車窓から見る景色は最高で、楽しくもありました。それから、山の景色と知らない道を走る面白さに惹かれ、二日ほどの休みを取っては国道を走り、いつのまにか五年が経っていました。石鎚山、剣山、三嶺の山々に続く国道も走りました。高知時代に行きたくても行けなかった天狗高原を走れた時は、感慨深いものがありました。

春霞前行く鳩の飛び立ちぬ

桜咲く山を白装束の越ゆ

杉木立過ぎたところの春の里

椿咲く岬の向うに水平線

お遍路の辿る岬の落椿

笹原を真つ直ぐに行くと夏の山

笹原を過ぎたる先は雲の峰

雲海を車窓に眺め嶺越ゆる

谷川の上に螢の舞ひ上がる

山里の吾の前行く秋菫

《作品鑑賞》

高尾ひとみ

四国の国道を走る、その雄大な景色が句から伝わってきます。読む人の想像力を掻き立てる作品になりました。子どもには詩が生まれるのでしょうか。

桜咲く山を白装束の越ゆ

お遍路さんの後ろ姿が見えます。お遍路さんは、どこどこる山桜の咲く道を辿り、次の寺へと山を越えるのです。

杉木立過ぎたところの春の里

少し薄暗い杉林を抜けたところに、桜や菜の花、土佐水木もでしょうか、色とりどりの花の咲く山里があったのです。

笹原を真つ直ぐに行くと夏の山

一面の笹原の中、滴るような夏の山に車を走らせます。季語「夏の山」がこの句の景色を大きくしています。

山里の吾の前行く秋菫

自分を先導するかのように赤とんぼが飛びます。赤とんぼらしい動きの見える句で、この特別作品に余韻が生まれました。